ヨブとその娘たち

Hans-Jörg Ronsdorf · 2021年4月 · 2026年10月改訂

ヨブ記についての連続講演をきっかけに、私はヨブの娘たちに目を留めるようになりました。彼女たちは、古代の魅力あふれる書物の中の小さな細部にすぎません。ヨブ記は、歴史上もっとも印象深い文学作品の一つです。読むのは容易ではなく、聖書の一書としてはかなり長いものです。それを一気に読み通せた人は、頭と心と霊を揺さぶる津波のような体験をします。この書が扱っているのは、正しく非の打ちどころのないヨブとその家族が、なぜこのような不当な苦しみと運命を経験しなければならないのか、という問いです。これは今日に至るまで大きな問いであり、ヨブ記は知恵文学という形でこの問いに有益な寄与をしています。とはいえ、ヨブ記も最終的な答えを与えてはいません。その答えは、ヨブとその友人たちが論じようとするような応報神学ではありません。つまり、「正しい者は祝福され、正しくない者は罰せられる」と単純に断定する考え方ではないのです。この原則は、世の苦しみに対する答えではありません。

けれども、それは私の主題ではまったくありません。先ほど述べたように、ここで扱うのは小さな細部、いわば「副産物」であり、それは聖書における女性の役割というテーマに関わっています。これまで私は、自分の本でも、その後の論考でも、旧約聖書の女性たちを取り上げてきませんでした。旧約聖書には、預言者、王、士師、指導者であった女性たちがいます（たとえば、預言者としてのミリアム、デボラ、フルダ、士師としてのデボラ、王妃としてのエステル）。それは普通のことではなく、例外としてです。しかし、そこから「これは神が望まれた役割像だ」と結論づけるのであれば、男性が指導し女性が従うべきだという根拠を旧約聖書から示さなければならないでしょう。創造の記事そのものは、その根拠にはなりえません。むしろ、男女の間の階層的な不均衡は堕落の結果であり、形はさまざまであれ、あらゆる時代の社会を形づくる一部となってきたのです。**階層は堕落の前ではなく、堕落の後になって初めて現れます。**

ヨブとその大家族はいつの時代に生きていたのか

ユダヤ教の伝統は、ヨブをアブラハム（そしてメルキゼデク）の時代の人と見ています。この物語がいつ起こったのかについては、もちろんほかにも説がありますが、この時代を考え、アブラハムとヨブの生活、試練、誘惑を一度比べてみるのは意味のあることです。

つまり、この二人は律法が与えられる前、律法に定められたいけにえの奉仕が始まる前に生きていたのです。一人は一つの民族の父となり、さらにはすべての信仰者の地上の父となります。ウツの地の人ヨブは、ヘブル人でもイスラエル人でもありません。それでも彼は生ける神を知っていました。どのように、あるいはどのような啓示によって神を知っていたのかは分かりません。この書の最後の数章で、神は直接ヨブに語られました。そしてヨブは、「しかし今、私の目があなたを見ました」（ヨブ42:5）とさえ言いました。それが彼の内なる癒やしとなったのです。ヨブは、定住地と砂漠が入り混じる地域、ヨルダンにいたと推測されています。

ヨブの物語はよく知られています。サタンは、神への信仰がどのように機能するかについて、自分なりの見方を持っています。それは取引であり、それどころか汚いゲームだというのです。報い

がなければ、神への忠誠もない、と。中東でもっとも裕福な人の一人であったヨブが、サタンの見方が誤っていることを示す実例となります。神を信じるすべての人について誤っているとは限らないにしても、ヨブについては誤っていたのです。この証明の代価は高いものでした。けれども、その結末がヨブの傷を癒やします。それは現実の人生ではむしろまれな結末です。苦しむ多くの人々は、この人生と苦しみの中で、ヨブのような救いを経験しません。

最後の章で、ヨブはすべてを二倍にして返されます。サタンが彼から奪ったものを、彼は二倍にして取り戻すのです。彼は10人の子どもを失いましたが、苦しみが終わった後、10人の子どもを授かります。

ヨブ記42章13節　彼はまた、七人の息子と三人の娘を持った。

14　彼は一番目の娘をエミマ（キジバト）、二番目をケツィア（シナモンの花）、三番目をケレン・ハプク（化粧の小角）と名づけた。

15　ヨブの娘たちほど美しい女性は、国中どこにも見られなかった。父は彼女たちに、その兄弟たちの間で相続地を与えた。

旧約聖書の中でほとんど類を見ないほどの、この三人の娘たちへの特別な強調は、ヨブの運命の逆転を示しています。娘たちへのこの強調が特別で並外れたものであるのと同じくらい、ヨブの運命の転換もまた比類のないものなのです。

そこの何が珍しいのか

それは、家父長制のこの時代、女性が財産や所有物として、品物や物と同じように扱われていた時代に、二つのことが目を引くという点です。

1. **名前が挙げられているのは三人の娘たちだけで、息子たちの名前は挙げられていません。**
2. **娘たちは兄弟たちとまったく同じように相続します。**

名前をつけ、兄弟たちを優先することなく相続を割り当てたのは、ヨブ自身です。ここには、父ヨブが娘たちに対して抱いていた大きな敬意が見て取れます。しかもそれは、彼の時代と文化の流れに逆らうものでした。これは一つの推測にすぎず、証拠としてではなく、むしろ手がかりとして理解していただきたいのですが、ヨブの苦しみは、女性に対する彼の見方を変えたのでしょうか。

彼は、アブラハムと同じように、そして私たちと同じように、自分の時代の子でした。彼も私たちも、自分が生きている社会によって形づくられています。当時の（そして今日も同じく）女性像は、創世記3章16節でエバに語られた罰のことば、「あなたは彼（あなたの夫）を恋い慕うが、彼はあなたを支配することになる」に対応していました。私はいつも、この夫と妻の関係、またその逆の関係は、神が思い描いておられたものに照らして測るなら、ありうるすべての形において

否定的だったわけではない、と言ってきました。肯定的な例外もありましたが、それは原則を裏づけるものでした。家父長制は、神がご自分の家族の父であられることを写し出したものではなく、この世の社会的な家族・氏族の構造であり、さまざまな形をとってあらゆる大陸に、そして保守的な福音派の世界にまで及んでいます。

いずれにせよ、ヨブは特別なものを息子たちにではなく、娘たちに見ています。

人生でもっとも大切な教訓を、私たちは良いことや快いことによってではなく、苦しみによって学びます。苦しみは私たちを変えます。しかし、それがいつも私たちを神へと引き寄せるという保証はありません。良いことも悪いことも、経験することによって私たちは神へと引き寄せられることもありますが、私たちの反応が怒りや失望であれば、神から遠ざかることもあります。ヨブは、ある意味で清められて苦しみから出てきます。彼は神との関係において、また自分の妻をはじめとする周囲の人々との関係においても、わだかまりのない状態にあります。

今日、多くの保守的なキリスト者が性別の問題について持っている見方は、女性の階層的な服従、そして礼拝で語ること、教えること、指導することの禁止です。さらに、家庭の領域こそが女性の聖書的な活動の場だというものです。この見方は、今日の牧師や長老や教会の指導者たちの間にあまりにも深く根づいているため、このこの世的な見方を捨て、創造者であり贖い主である方の見方を受け入れるには、何か特別なことが起こらなければなりません。いいえ、そのために一人ひとりにヨブのような物語が必要だと言いたいのではありません。ただ、考えを改めるには、公式を一つ組み替えるだけでは足りないということです。それはずっと深いところに関わることであり、考え直し、そのために立ち、それにふさわしく行動する勇気が必要なのです。

ちなみに、問題は、男性が女性を美しいと思ってはいけないということではありません。三人の娘たちは際立った美人で、ヨブにとってはほとんど三人の天使のようでした。男性はこの美しさを自分のものにしたいと願います。男性はこの美しさを慕い求めますし、それは許されていることです。けれどもそれは、自由に処分できる所有物としてではなく、それを守り、喜び、それに対して誠実であり続けるためです。ヨブ自身がそのように生きたとおりです（ヨブ31:1）。

名前

三人の娘たちの名前は、私たちの耳には珍しく響きますが、旧約聖書ではよくあるように、意味に満ちています。ベネディクト・ペータース（Benedikt Peters）は、そのヨブ記注解の中で、これらの名前を次のように説明しています：

「14節 『**彼は一番目を……と名づけた**』。私たちが知らされるのは、ヨブの娘たちの名前だけである。一番目の娘は**エミマ**（jəmîmâh）と呼ばれた。これはjôm「日」に由来し、およそ「**昼のように明るい娘**」という意味である。これは、ギリシア語の女性名ヘレネー、「明るく輝く者」にほぼ相当する。苦しみの夜の後、今やヨブには幸いの明るい日が昇ったのである。この名前は、アラビア語の語根に従えば「鳩」を意味することもありうる。

二番目の娘は**ケツィア**（qəṣîʿâh）と呼ばれた。これは香りのよい香料カシア（桂枝）である（出エジプト30:24; 詩篇45:8）。ケレン・ハプク（qæræn happûk）は、女性たちの黒いアイシャドウ

であるスティビウム（アンチモン）を入れておく角である。」[1]

「回復された彼の繁栄を指し示す三つの名前（創世4:25; 5:29）。

エミマ――「日の光」。彼の悲惨の「夜」の後に。ただしマウラー（MAURER）によれば「鳩」。

ケツィア――「カシア」、香りのよい植物（詩篇45:8）。彼のいとわしい息（19:17）と腫れ物に代わるもの。

ケレン・ハプク――「スティビウムの角」。女性たちがまぶたを染めるのに用いた顔料。彼の「ちりで汚された角」とは対照的である（あるいは「私の誇りと名誉は泥の中にある」、ノイエス・レーベン〔Neues Leben、ドイツ語聖書翻訳〕）（ヨブ16:15）。

これらの名前は、彼の娘たちの美しさをも示している。」[2]

相続分

「15節　『兄弟たちの間での相続分』――これは東方では娘たちにとって異例の恩恵であった。ユダヤの律法によれば、娘たちは息子がいない場合にのみ相続したからである（民数27:8）。これは繁栄と一致の証しである。」[3]

「そして彼らの父は、兄弟たちの間で彼女たちに相続分を与えた。ヨブのこの行為は、モーセ律法の規定（民数27:8）に厳密には反するものであり、むしろ特にヘブル的な慣行よりもアラブ人のある種の家族の習慣にその並行例が見られるものであるが、娘たちが結婚した後も兄弟たちの間で暮らし続けられるようにするためのものであった。**それゆえこの行為は、ヨブの以前の子どもたちの間と同じように、これら後の子どもたちの間にも支配していた兄弟姉妹の一致のしるしとして言及されているのである（1章4節参照）。**」[4]

ベネディクト・ペータースは、そのヨブ記注解の中で的確にこう書いています。「神が私たちを名前で呼ばれるとき、あるいは私たちに名前を与えられるとき、神は私たちがご自分にとってどれほど大切な存在であるかを示しておられます。ヨブの回復は、確かに、時代の終わりにおける万物の回復の手付金です。そのとき、女性たちもついにふさわしい地位に高められ、人類の歴史の何千年にもわたって拒まれてきた栄誉が、ついに彼女たちに与えられるでしょう。その栄誉を彼女たちに与える責任を負っているのは、ほかならぬ男性たちです。**『同じように、夫たちよ、妻が女性というより弱い器であることをわきまえて、知識に従って妻とともに暮らしなさい。また、いのちの恵みをともに受け継ぐ者として、妻を尊敬しなさい。そうすれば、あなたがたの祈りが妨げられることはありません』**（ペテロ第一3:7）。男性は、相続人として妻たちにふさわしい栄誉を、妻たちに与えるべきです。なぜなら『**彼女たちの父**』が彼女たちに『**兄弟たちの間で相続分**』を与えたからです（民数27:7参照）。」[5]

男性が支配していた時代にあって、ペテロは、信仰を持つ男性たちにさえ、女性たちも今や同じように相続するのだということに注意を向けさせる必要があると考えました。モーセ律法では、それは兄弟がいない場合にのみ当てはまることでした。

しかし、キリストにあっては男も女もありません（ガラテヤ3:28）。ですから、ベネディクト・ペータースも、彼自身の考えによれば女性たちにふさわしい地位へと、ほんの一部分だけ彼女たちを高めるのではなく、その道を最後まで歩んでくれるなら、それは祝福となるでしょう。女性たちに一方的な服従を課し、語ること（祈ること、説教すること、教えること）や指導することを禁じることこそ、まさに堕落した世界のしるしであって、新しい創造のしるしではありません。新しい創造は、これから来るのではなく、新しい人である教会とともにすでに始まっているのです（エペソ2:15）。

ヨブの娘たちについては以上です。彼女たちは灯台のように群衆の中から際立っており、すでに古代において、女性がどれほど価値ある存在であり、兄弟たちと等しい立場にあるべきかを指し示していました。当時すでにそうであったのなら、今日はなおさらです。

注

1. Benedikt Peters, Kommentar zum Buch Hiob（ドイツ語）, Bielefeld: CLV 2020, 412頁。
2. Jamieson, R. / Fausset, A. R. / Brown, D., Commentary Critical and Explanatory on the Whole Bible, I, Logos Research Systems, Inc., Oak Harbor, WA 1997, 344.
3. Jamieson, R. / Fausset, A. R. / Brown, D., Commentary Critical and Explanatory on the Whole Bible, I, Logos Research Systems, Inc., Oak Harbor, WA 1997, 344.
4. Lange, J. P. / Schaff, P. / Lewis, T. / Zöckler, O. / Evans, L. J., A Commentary on the Holy Scriptures: Job, Logos Bible Software, Bellingham, WA 2008, 631.
5. Peters, Kommentar zum Buch Hiob, 412頁。